

引き継ぐ伝統、響かす音色

弘大囃子組とは？

平成二十三年度に設立された、弘前大学の課外活動団体の一つ。囃子方としてはもちろん、運営としても参加し、津軽地方の様々な祭りに携わることを目的としている。

囃子では、太鼓や笛、鉦（かね）といった独特な楽器を用いるが、およそ五十人いるメンバーのうち八割は当初未経験者だったという。メンバーは囃子に限らず、MCやダンスなど各々の得意分野を生かして祭りやイベントを盛り上げている。

一年中引っ張りだこ

祭りといえば夏のイメージがあり、活動も夏に集中している。だが、実は一年中忙しいという。春は本番に向けた囃子の基礎練習、冬には雪灯籠まつりでの演奏がある。年間を通して小学校や老人ホームからの演奏依頼も受けている。

今年の十月二十二・二十三日に行われた弘前大学総合文化祭、通称「弘大祭」でもお囃子を披露。弘前ねぶたや青森ねぶただけでなく、五所川原の立佞武多やお山参詣の囃子も演奏した。観客は、秋の弘前に響く祭りの余韻に耳を奪われていた。

津軽と南部、地域性は祭りにも!!

弘大囃子組に入ったきっかけについて「地元・八戸と弘前では、祭りにどのような違いがあるか知りたかったから」と話す黒澤さん。八戸市出身の黒澤さんは、以前、八戸市で開催されている八戸三社大祭で囃子方として笛を吹いていたそうだ。

双方の祭りを知る黒澤さんによると、弘前を含めた津

軽の祭りは「囃子を重視すること」が特徴だという。例え

ば、八戸三社大祭では太鼓の演奏を子どもが担当してお

り、仕掛けが施された山車が一番の主役だ。一方、弘前ね

ぶたや青森ねぶたなどでは、大人によるクオリティの高い

お囃子が披露され、山車と同じくらい見どころとして注目を集める。

祭りを見る際に、地域性の違いに注目してみるのも面白いかもしれない。

祭り経験者がいない！

新型コロナウイルス感染症の影響は、祭りにも及んでいる。なかでも弘大囃子組を悩ませたのが、「上級生が祭りを経験していない」という問題だ。

現三年生が入学した令和二年は、祭りの中止を余儀なくされた年。それ以降二、三年開催されなかつた祭りも少なくなかつた。特に県外から弘前へ来た学生にとつては、祭りに参加するどころか、見る機会もなかつたのだ。

囃子方として祭りに参加するということは、祭りの一部になるということ。彼らには、観客を楽しませることが求められる。今年は各地で祭りが復活し活動の機会が増えたものの、初参加のメンバーが多く不安も大きかつたようだ。

囃子方として祭りに参加するだけではなく演奏体験も行っている。

さらに影響を与えたのがコロナ禍という状況だ。祭りの再開が決まった後に準備が滞る場面を見て、「(祭り)やらないと伝統がなくなってしまう」と痛感したという黒澤さん。「毎年続けて開催することに意味があると思った」と話していた。

そのような環境において、弘大囃子組が果たす役割は非常に大きい。やりがいについて黒澤さんは、「囃子の音色を聴いて泣いてくれたおばあちゃんの姿を見たときは、心に届く演奏が自分たちにもできるんだなと感じた」と体験談を語ってくれた。

弘大囃子組の今後の目標は、生演奏ならではの囃子の迫力を身近に感じとつてもらうことで、聞く人を楽しませることはもちろん、後継者の育成に貢献すること。祭りも囃子も形のないものだからこそ、その価値を伝えていくことが大切だ。

取材先
弘大囃子組
代表 黒澤光さん
(弘前大学理工学部3年)



弘前の祭りが抱える問題

幅広く祭りに参加している弘大囃子組。その分、祭りを取り巻く様々な課題を目の当たりにしている。

その一つとして挙げられるのが、人手不足という問題だ。昨今、

祭りの後継者となる若者が減っていると言われるが、残念ながら

青森県も例外ではない。弘大囃子組も、県内中のあらゆる祭りの

団体から声がかかり「来年も頼むね」と言われるそうだ。祭りに興味をもってもらい、参加者を増やすための活動として、小学校

では演奏を披露するだけでなく演奏体験も行っている。

祭りの後継者となる若者が減っていると言われるが、残念ながら

青森県も例外ではない。弘大囃子組も、県内中のあらゆる祭りの

団体から声がかかり